まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 36

中国（桂林）

特 やさしさを探る 集

『やすらぎのあるまち』

- ●木のぬくもり－山村の活性化を目指して－
- ●集　落　考
- ●やさしさとこと起こし
- ●自然休養林　諏訪崎
- ●泉の再生でやすらぎの泉トピア21

アングル

ゆとり社会と観光の役割……愛媛県観光協会会長／永野　浩……1

特　『やさしさを探る』　**集**

「やすらぎのあるまち」

木のぬくもり～山村の活性化を目指して……久万町／渡部鬼子雄……2

集落考……伊予市／福岡　将也……4

やさしさとこと起こし……大西町／越智　忍……6

自然休養林　諏訪崎……八幡浜市／入山　忠義……8

泉の再生でやすらぎの泉トピア21……松前町／久津那延幸……10

論談　ーまちづくりー

生涯学習のまちづくりーその3ー……愛媛大学教育学部教授／讃岐　幸治……12

えひめ地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めてー管見スイスを歩いた2週間／見想録Ⅶ……14

ふれあい広場

リレーでちょっトーク（大洲市・新居浜市から）……16

元気印レポート……18

〈ヒューマンライフ・・・〉

〈アトリエU・M・Aって何？〉

レポート

交流による活性化を目指したまちづくり

～まちづくり先進地県外研修記～……22

研究員活動を振り返って……中山町役場／上ノ田　誠一……25

Information

媛のくにフラッシュ……26

〈宇和町・吉海町・御荘町・新居浜市〉

「舞たうん」読者アンケートの実施結果について

特集〝交流〟

今号のテーマ
ーやさしさを探るー

今日、物質的な充足感から、価値感の多様化が進み、人々は物の豊かさから心の豊かさを求める時代へと変化してきている。そして、まちづくりの営みも、地域の拠点施設づくりから、施設と利用者との関わり、さらに、人と人との交わりの中からまちづくりを見つめ直す方向へと、確実に変化している。

このような時代背景の中で、一人ひとりが「それぞれの豊かさの原点」を探りながら、「個性」を尊重し合うことが重要視され、まち・むらの暮しの中では、「個」が発揮され、活かされ、認められるようなまちづくりが望まれている。

そして、一人ひとりが楽しく生き生きと暮していくために、人、自然、文化等の地域資源を舞台に、日々の営みの中でお互いが触れ合い、「やさしさ」や「思いやり」の心を持って、やすらぎが実感できる地域社会の創造が、今、求められていると考えられる。

そこで、特集のメインテーマを「やさしさを探る」とし、今回は、人と物との関わりという面からまちづくりの原点を探るため、「やすらぎのあるまち」というサブテーマで、特集を組みました。

表紙の言葉

七月、雨期で一番蒸暑い中、広州から桂林へと廻って入った。桂林は確かに雨が多い。昨夜まで降り続いた雨は、翌朝一時の晴れ間を見せたがすぐ土砂降り。

江の乗舟場まで走る頃、曇り空でまさに山河の真珠、風光媚美、山水画の世界でした。波々とあふれるような水路八十三キロを、通常の半分余りの時間で、あっという間に下り切ったのでした。

柳原あや子

中国（桂林）

ゆとり社会と観光の役割

㈳愛媛県観光協会
会長　永野　浩

物の豊かさから、心の豊かさへと変化してきた今日の社会にあって、愛媛県においては、ゆとりあるいきいきとした暮しと創造的な文化活動を営むことができる県づくりが推進されており、観光の果たす役割は、ますます重要となってきております。

このような中、県内の市町村をはじめ、商工会、農協など様々な分野においても、地域活性化のために、鋭意取り組みがなされているところであります。

県観光協会においては、本県が誇る自然景観を始め、歴史と伝統文化、個性豊かな観光施設を広く全国に紹介し、観光えひめのイメージアップを図るとともに、積極的に観光客の誘致に取り組んでいるところであります。

ここ数年、本県を訪れる県外観光客は七〇〇万人を越えております。

これは、四国縦貫・横断自動車道の建設促進、松山空港の整備拡張、ＪＲ予讃線の電化など観光の受け皿となる基盤整備が着実に進められていることに加え、官民が一体となって観光愛媛のイメージアップ事業、観光キャンペーンの継続展開、国際観光の推進等に取り組んできた成果であると確信しております。

また、国際交流の進展に伴い、海外旅行の隆盛により、我が国を訪れる観光客も増加の一途をたどっておりますが、本県にも韓国、台湾などから、六七、〇〇〇人の外国人観光客が訪れています。

当協会においても、既に数度にわたり韓国との観光交流を行っており、親善と誘致に努めているところであります。

昨年は、松山空港から約五〇便の国際チャーター便が就航しておりますが、韓国へは約半分の二七便が就航しました。こうした交流実績を踏まえ、松山～ソウル定期便の早期開設が望まれておりますが、実現の暁には、韓国からの観光客の増加は勿論、四国、愛媛の優れた観光資源を広く紹介できるものと期待しております。このほか、本県を訪れる外国人観光客に対し、市町村を窓口にして記念品及び国際観光パンフレットを贈呈することによって歓迎の意を表するとともに、国際交流の促進と国際観光の振興に努めております。

さらに昨年度からは、観光地活性化事業、ホテル・旅館・外食産業等のための事業、国際化に対応した外国人観光客等受入れ体制の整備のための事業に対し、県の助成措置が講じられております。

本協会では、これらの施策を活用して観光産業の振興と会員の福利を一層増進するとともに、組織運営を健全化し、対外的信用を高め地域の発展に寄与するため、昨年七月、愛媛県観光協会を社団法人化し、組織の拡充強化を図りつつ、急速に変化増大する観光需要に対応できる体制づくりに努めているところであります。

今後とも、県をはじめ関係各位の御指導、御協力をいただきながら、国際化時代に対応した観光地づくりと、潤いと活力のある愛媛づくりに微力を尽くしたいと考えております。

特集

やさしさを探る

～やすらぎのあるまち～

木のぬくもり ―山村の活性化を目指して―

久万町助役　渡部　鬼子雄

一、押し寄せる来訪者

昭和六三年、久万町は小学校・美術館を木造で建築し、これらをテーマにした「木のシンポ」や「木造建築フォーラム」を全国の市町村に呼び掛けたが、ＮＨＫを始め、各放送局・新聞・雑誌が、このことを大きく取り上げた関係もあって、少々オーバーにいえば、小学校の校長先生はこの対応に忙殺され、町議会の一般質問でもこの対策が問われるという一幕もあった。

来訪者も既に一万六千人を超えており、北は北海道から、南は沖縄、いや、カナダやニュージーランドにまで及んでいる。

その後、さらに久万町では、直瀬小学校・集落体育館・天体観測館・公営住宅と、木造建築を進めてきた。

〈天体観測館〉

二、閉ざされてきた木造の歴史

私も、役所の中にあって、公共建築物は鉄筋コンクリート工法に依るべきで、鉄筋建築は半永久的な建築物だと思ってきたし、何の抵抗もなく非木造化の方向こそが建築の近代化だと信じてきた。

戦後この方、建築基準法も、消防法も、公共建築物は非木造に限るとされ、田舎町の久万町の公営住宅すら鉄骨、ブロック構造なのである。

しかしながら、昭和三〇年代後半に建てた役場庁舎、四〇年代後半の町民館・小学校・国民宿舎など、雨漏りやひび割れ・電気・電話・水道の具合が悪くなり、修理をしようとすれば、予想外の経費を要することが次々に判明した。

また、ブロック構造住宅などには住めたものではなく、入居者から苦情が絶えず、手を焼いてきたものである。

三、環境問題についての世論

昭和五〇年代後半、我が国の環境問題が大きくクローズアップされてきた中、戦後久万町では、育林に最重点を置いて推進してきたにも拘らず、伐採時期に達した木材価格は、一〇年前と一向に変らず、逆に木材搬出経費などは二倍、三倍になっている。

また、個人住宅にしても、プレハブ工法を主体とする外材中心の建築が蔓延しており、国産材の利用価値は毎年のように片隅に追いやられてきたのである。

これでは、久万町が木を育てることに一生懸命になっても駄目ではないかと、真剣に考えるようになったのは、昭和六〇年代の初めであった。

そのようなことから、関係省庁への働きかけも始め、全国の林業地とも連絡をとって、公共建築物に「木造」をという悲痛な叫び声を上げることともなった。

手始めは、公営住宅の木造化であった。設計事務所一〇社に木造建築コンペを行って、三種類の「木造住宅」モデルを造ったりしたのは昭和六〇年であった。

四、三〇年間の空白

文部省が「木造建築」モデルを採用することになった六二年、久万町では、小学校の一つを木造で建て替えることになった。

もちろん、設計コンペに依ったが、外観はともかく構造上や内装の点では、それは大変で、一千平方メートルを超える木造建築には、防火壁が必須条件であった。

久万町が採用した工法は軸組工法であった。従って土壁、つまり湿式工法であった。

しかし、木材の調達から始まって製材・加工・大工・左官などの職人不足等の問題、工事現場の苦渋に満ちた実態から、当初一年間で仕上がるのは当然の如く思われていた工期を、関係方面に泣きついて、一年半に延長することを認めてもらわざるを得なかった。

これらのことは、およそ三〇有余年にわたり、建築を取り巻く環境の隅々にまで大型公共建築物から木造建築が完全に排除されてきたことの表れともいえる。

また、本町の木造建築を代表する小学校・美術館にしても、外観もさることながら、その機能性の確保において大変苦悩した。

〈直瀬小学校〉

日本建築の場合、玄関とか、床については、やたらと気を使うが、一般的に使い勝手が悪いという評である。また、学校などのように、広い空間が欲しいという場合、柱が邪魔になるといった問題まで含めて様々な障害があった。

五、木のぬくもり

久万の木造建築運動は期せずして、全国各地に拡がりをみせてきているし、建築学会や各種木造建築に関する研究機関などの動きも活発になってきている。

今後、木造建築が新しいデザインの視点から積極的に見直され、同時に、住宅産業として部材化されることも必須の条件であろうかと思われる。

しかし、なんといっても使う側の人達が、木材の良さを再認識するということが最も大切なことのように思う。

久万町の場合、二つの小学校・美術館・体育館、あるいは天体観測館にしても、そこに住んでいる人々が、胸をはって木造建築の素晴らしさを強調できることこそ大切だと思うのである。

幸いにして、我が町の木造公共施設は、いずれも〝生き生き〟としていて、さらに、これからも木造化への歩みを続けていくことは間違いないことだろうと確信している。

〈久万美術館〉

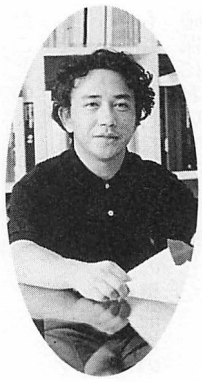
特集

やさしさを探る

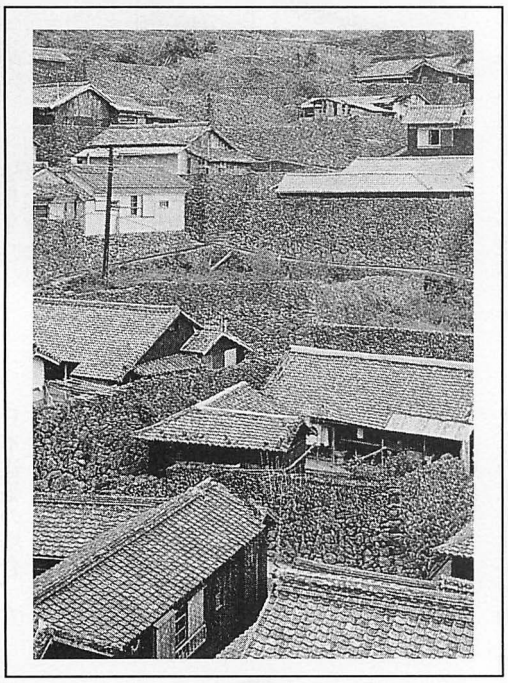
～やすらぎのあるまち～

「集落考」

伊予市　アトリエA＆A　福岡　将也



確か二〇年余り以前であったと記憶しているが、東京芸大の学生たちによって、西海町外泊周辺の集落調査が行われた。当時東京で、学生だった私は、建築雑誌に掲載されたその地元の漁村を初めて知った。



▲石垣の家

数年後、四国へ帰り外泊を訪れる機会を得たが、既に「石垣の里」として毎日グラフ等の雑誌にも紹介され、観光客も増え、調査時の面影が少しずつなくなりかけていた。

この集落は、冬の北西風に抗して、家々の周囲に石垣が回らされ、住居は回型の中庭をもつコートハウス型プランで、都市住居が喧噪からプライバシーを守るのと同様、厳しい自然環境から身を守るべく、数十戸の家々が寄り添うように石垣の中にあった。丹念に積まれた石垣の石一つひとつに、「集まって住む」ことの暖かさが感じられて、当時、建物と建物の『間』のことについて考え始めていた私は、大変感銘を受けた記憶がある。

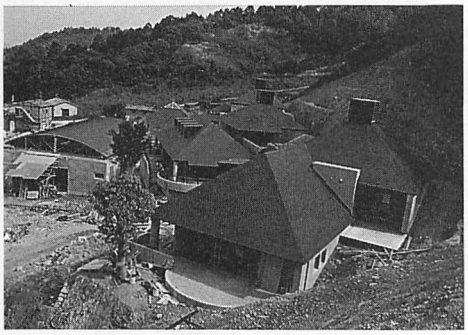
人は自然を享受したり、自然と対峙したりしながら、営みを織り成して「風土」を芽生えさせて行くが、この集落のように、歴史を経てできあがったものの、統一と変化を持つ有機的なまとまりは、行政の都市計画や建築の設計者たちだけでは担い得るものではないと実感した。

ものを造る立場にある設計者には、大きく分けて二種類のタイプがある。一つは、極めて概念的にアプローチして論理の構成とその結果としての建築を表現するタイプである。もう一つは、敷地の「場」の持つ諸条件が示唆するコンテクストに従って、デザインを探して建物を造って行くタイプである。

かつて社会資本として建築があったが、社会的価値感は、それにとって変わって、そこで何がコ

ミュニケイトされ、どんな情報が発信されるかということに変化してきた。それに対応するべく、建築についても「個」として質の高い建物が求められてきているが、私たちが目を向けなければならないのは、建築が集まると必然的に生まれる建物と建物の『間』であるように思われる。

集まることによって集落ができ、村や町が生まれる。建物と人と、『間』が関わりながら、風土が育まれる。『間』は「集まって住まう人たちの作用から生まれるもの」と考えている。私たちは先に述べた後者のタイプに属し、関わって来た建物には、コンセプトにも、また形態にも、「集まる」という行為の手助けになるように集落にある。周辺には、「屋根付橋」や「水車小屋」があり、村並みを保存しようとする地域の人たちの人情に、隣人だけでなく周囲の建物や自然を理解しようとする配慮が感じられる。



▲大護幼稚園

▲内子町農村活性化センター

建築の設計に携わる私たちは、地域と広い接触面を持ち、その持つ矛盾を含めて、社会の切断面を現実の表現として差し出すことができるという恵まれた立場にある。この爽快ともいえる行為を享受することは、一方では大きな責任を伴う。「個」としての建築は、やはり独創的で品質の高いものでなければならないが、基本的な「ヒューマニティ」、つまり、隣人や周囲の自然をも含めた他者へのおもいやりに欠けたものであってはならない。

先日、先の集会施設の竣工パーティーに招かれた。地域の人たちが用意してくれたのは、地元のおかみさんたちが早朝から仕込んだ季節の山菜のバイキング料理であった。

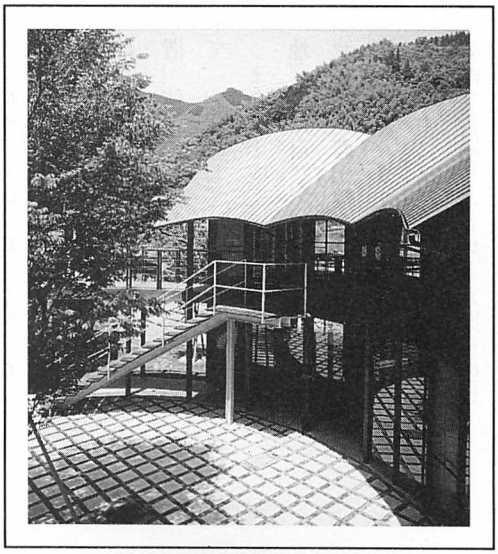
かつて出席したどのパーティーの料理よりも味わい深く感じ、微酔い気分で中庭に出ると、数人のおかみさんたちから労いの声をかけていただいた。

外泊の石垣の集落を見て実感した設計者としての微力は、やはり現実としてあるが、割烹着に包まれたおかみさんたちの暖かさに、外泊の石垣に見た力強さと同質のものを感じた。

こういう力強さの集積以外に、家を、集落を、創り支えるものはないということを、私たちは、学ばなければならない。

写真にある建物は、松山市内の幼稚園と、内子町に先頃完成した集会施設である。公共性の強いこの二つの建物は、共に先に述べた意図が込められた事例である。

内子町の集会施設は、桝川という川沿いの、小さな谷あいの中のとの願いが込められいる。



特　集

やさしさを探る

～やすらぎのあるまち～

やさしさとこと起こし

大西町役場　越智　忍

◆はじめに・・・

そんなに遠くない昔、子どもたちは境内で、収穫後の田んぼで、海や山や川で、自然と戯れながら成長しました。豊かな自然はひとづくりには欠かせない要素のひとつであり、まちづくりを進めていくなかで、自然環境と調和したうるおいある快適な環境実現のためのこと起こしには、「やさしさ」が必要であると考えています。

が、この「やさしさ」とは何ぞや…！

地球にやさしいとか、人にやさしいとか!!

浅学非才な自分に分からないまま、行政という仕事をさせて頂いているが、きっと誰もが、おだやかとか、すなおと感じられる物とか、施設とか、空間であり、要は人が求めている原風景であるような気が!!

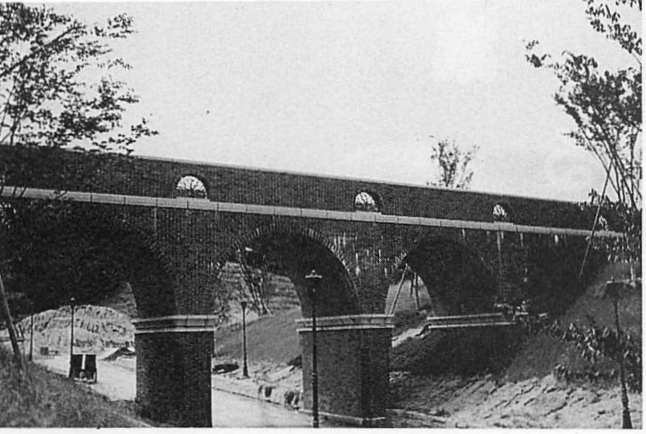
◆そして今・・・

初めに、大西町の概要ですが、愛媛県の中央高縄半島の西北部に位置し、隣接に今治市が、また県都松山市へは約四〇kmと、比較的恵まれた位置関係にあります。昭和三〇年代前半までは、みかんと稲作の純農村地帯でありましたが、造船関連企業誘致を契機に、昭和三〇年の町制施行当時、約七千人の人口が昭和六〇年には約九千六百人に増え続け、ここ数年は僅かな増減で安定しております。地場産業と都市近郊の立地条件から、町全体の年齢比率をみると、県平均より少し若い町です。

しかし、企業誘致等による人口増加により、農村地域においても都市化傾向がみられ、併せて行政主導の利便性・機能性等を重視する画一的なハード面の整備により、従来培われてきた文化や風土が徐々に失われつつあるようで、住民の連帯感の希薄化から地域活動面にも変化がみられ、自治活動の低下もみられるようです。近年、余暇やゆとりという新しい生活空間が、いわゆるふるさと創生時のアンケート調査からも望まれており、地域住民が享受でき、地域が一体となってふるさと意識を醸成できるまちづくり、ひとづくりの発信の場のこと起こしが望まれているようです。

こうした中、このこと起こしとして、平成元年に人にやさしい快適空間づくりの一環として、従来のサイレンによる時報に変えて、十個の音階をもつ大小のベルによって曲を奏でるベルツリーを設置、住民の選曲した曲を時報として、お届けしているところです。

また、平成二年より本町の中心地区内に自然・健康・文化をテーマとした藤山健康文化公園整備を進めております。公園面積十三・五haの中には、丘陵地・農業用ため池・古墳などといった既存の地



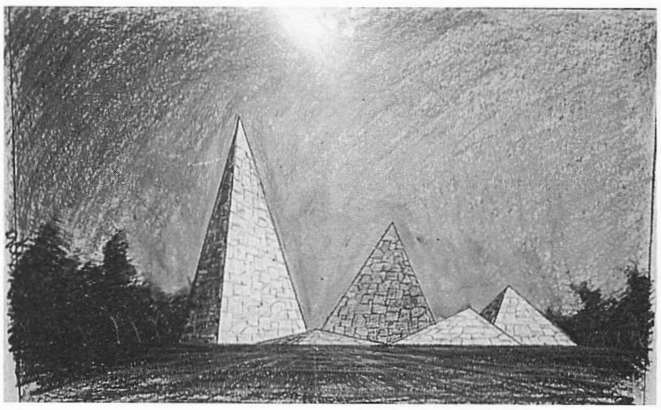
〈藤山健康文化公園〉
上段“文化のかおりのある水道橋”
下段“修景池・親水スペース”

形や先人の社会的資本・文化遺産を活かし、できる限り自然と違和感のない施設整備に配慮し、園内各ゾーンにテーマを持たせ、基本的には自然と文化の調和を図っております。公園の山手には、県内屈指の妙見山古墳がありますが、四世紀初頭に築造されたとされる最古級の前方後円墳であり、現在愛媛大学の下條教授を中心に調査が進められており、調査終了後には築造当時の状態に復元するなど、いにしえ展望広場として、当公園の主要なランドマークとして位置付けたいと考えております。自然と文化の薫りにあふれた公園は、地域住民のレクリエーションの場のみならず、歴史ある広域的な緑のオープンスペースと憩いの場として、平成六年十月一部開園(七・〇ha)、平成九年度全域完成を目指しているところです。

また、海岸部に目を向けると、本町は約八、五〇〇mの様々な海岸美を有し、素材的に町内外に誇れる資源として認識されております。また、国道一九六号線を今治市から松山市方面へ車を走らすと、最初に眼下に映る海岸風景のなかに平成二年度から、こと起こしの「ザ・海べ、星の浦海浜公園」があります。かつての白砂青松の原風景の復活と、水とのふれあいを求める人々への便益施設を整備しているもので、現在でも春先の潮干狩り、夏シーズンの海水浴、海洋レジャーに多くの人で賑わうところでもあります。整備にあたっても、地域の保全を図り自然を満喫できるよう配慮して、本年度完成を目指しているところですが、既に公園内では、〝夢遊び21〟(生活文化若者塾)による町内案内イラストマップが設置されたり、自発的に発足した〝夢街道196風おこし〟による開園前のイベントが開催されたりするなど、地域住民のアクションが始まっています。

◆終わりに・・・

最近、わが国でもようやく景観に目を向けた整備がされるようになりましたが、美しいまちの歴史や自然をそれにふさわしい形で残したり整備することを、地域住民がうるおいとかやすらぎと感じ求めるなか、このふさわしい形に合意形成されたものが「やさしさ」であるような気が致します。この「やさしさ」に「したたかさ」を加えて、あらゆる人たちと共にまちづくりができれば、この上ないこと起こしではなかろうかと考えている今日この頃です。



星の浦モニュメント

特集

やさしさを探る

～やすらぎのあるまち～

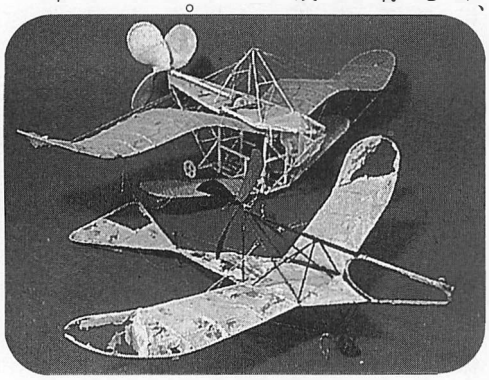
自然休養林諏訪崎

八幡浜市役所　入山　忠義

みかんと魚、そして飛行機の父二宮忠八翁生誕の地八幡浜市。昭和一〇年二月に市制施行、県下一二市中、四番目に古い誕生である。人口は、約三万八千人。

四国の西の玄関口八幡浜市は、九州とのフェリー基地として、年間四五万人もの乗降客がある。また、日本一の品質を誇るみかんの産地、そして、トロール漁業で栄える町として知られ、さらに、自ら考案したカラス型模型飛行器（機）で、日本で最初に飛行実験に成功した二宮忠八翁の生れたまちとして、今脚光を浴びている。

観光の名所旧跡に乏しい港町八幡浜であるが、今回は本市で唯一の景勝地である諏訪崎をご紹介します。



忠八翁考案の模型飛行機

昭和五〇年、八幡浜市総合計画「みんなできずくまちづくり」の中で、諏訪崎の整備が重点施策として取り上げられた。このことは、市民の積年の夢であったことから、大きな期待が寄せられることとなり、朗報として市民に伝えられた。

諏訪崎は、市街地から約五キロメートルの地にあって、佐田岬半島宇和海県立自然公園に位置し、延々約三キロメートルにも亘る七浦の入江に恵まれ、岬の先端部には、魚の町の象徴ともいえる魚霊塔や灯台が自然の中にひっそりと佇む。その美しさは、ミニ佐田岬半島といわれるように景観が素晴らしく、宇和海に浮かぶ佐島や大島が一望できるほか、佐田岬半島や良く晴れた日には、遠く九州を望むこともできる自然豊かな景勝地である。

魚の町の象徴〝魚霊塔〟

昭和五〇年、市民からの提言、要望に応え、〝まちづくり〟の大きな柱として諏訪崎開発を位置づけ、『自然休養林』として整備することが決定したのである。五一年から二年に亘って林道を整備し、五三年から本格的に着手、約六億円を投入して、五七年五月にオープンした。面積は、三二・八一ヘクタール、遊歩道の総延長約四キロ、東屋、駐車場、ログハウス、キャンプ場などを整備した。また、ツツジ一万一千本、サクラ一千五百本のほか、アジサイ、ツバキ、ハギなど五七種に及ぶ約三万本の樹木を植栽した。

この事業の完成により、永年に

四季の花咲く遊歩道

亘って願望してやまなかった市民の憩いの森『自然休養林諏訪崎』が実現したのである。

六〇年には、市制五〇周年を契機として、初めての「諏訪崎まつり」を開催した。今年で九回目を迎えることとなったこのまつりも、当日は市街地から無料送迎バスを運行するとあって、約五千人の老若男女で一日中賑わう。四月中旬のまつりの頃は、サクラ、ツツジが満開。諏訪崎の一番美しい時期をとらえて行うため、いろいろな出店が軒を連ね、茶会や句会、モデル撮影会、そしてこども宝さがし、魚釣り大会の催しなど、多彩なイベントも春爛漫の気分で満喫することができる。

なんといっても諏訪崎は、「四国の自然百選」を初め、「四国の二〇景」「森林浴の森日本百選」、そして「えひめの感動の地二〇選」と、実に四つのタイトルをもった折紙つきの景勝地。これが本市の誇る自然の魅力いっぱいの諏訪崎である。

そこは、周囲を宇和海に囲まれた小さな岬。沖行くフェリーや漁船の白い波と紺碧の海、遊歩道沿いに咲く四季の花々、澄みきった青空と太陽、そして樹木の木洩れ日、潮騒、さらには多くの野鳥が生息し、小鳥のさえずりが聞かれる自然そのもの。

一方、ヤブツバキ、ウバメガシの常緑樹やハゼの木、ヤマハギの落葉樹のほか、ツツジ、アジサイなど四季折々の彩りを添える樹木の種類も非常に多い。また、ワラビ、ツワブキなどの山菜の宝庫として訪れる客も多く、人気を博している。

ログハウスから
宇和海が一望

林内には、林間キャンプ場、わんぱく砦、東屋、ログハウス、きのこの森などの施設が整備され、遊歩道では、森林浴や自然散策を十分楽しむことができる。

この諏訪崎も今年で十一年目を迎え、今では、年間約二万八千人が訪れるまでとなった。「見る、歩く、学ぶ、楽しむ、鍛える」ことのできる憩いの場であります。

わんぱく広場で遊ぶ子供たち

時間に追われ、ともすれば文明の中にどっぷりと身も心も奪われてしまいそうな現代社会にあって、自然とのふれあいを通じた、心のやすらぎといった人として大切なものを忘れてしまっているのではないでしょうか。

諏訪崎に一歩足を踏み入れると、誰もが思いっきり生きていることを感じることができると思います。

この素晴らしい財産を後世に伝えていくことが、我々の責務のように思えてなりません。

憩いとやすらぎの欲しい方、諏訪崎を訪ねてみて下さい。

特集

やさしさを探る

～やすらぎのあるまち～

泉の再生でやすらぎの泉トピア21

松前町役場　久津那　延幸

◆はじめに

近年、居住環境の整備を行なう上で、「うるおい」「やすらぎ」といった、人々の心を和ませる機能を持った空間が要求される時代になってきました。

つまり、ハード面ではこれまでの機能性の優先から自然や景観の保全、ソフト面では自然とのふれあいといったものを重要視するようになってきたということです。

松前町においても二一世紀に向けた公園都市のまちづくりを目指し、現在、その一環として平成三～五年度の三か年計画で、「松前町泉トピア21整備事業」を実施しています。この事業は、都市化の進行に伴い失われつつある泉を再生することにより、生活の中に自然環境を活かした地域住民の休養と交歓の場としての親水公園を整備するものです。

◆地理的背景

松前町は、重信川を軸として開けた道後平野の西南部、重信川の最も下流部に位置しています。

重信川は高縄山系に源を発し、道後平野を西へ流れ伊予灘に流入する河川です。慶長年間（一五九六～一六一四）足立重信によって大改修が行われ、ほぼ現在の流路に固定されるまでたびたび変遷していたようです。

このため、町内の地下水の流れは、重信川の旧流路とほぼ一致しており、現在も多くの自然湧水の泉を有しています。このようなことから、当町は、人間の生活になくてはならない「水」に大変恵まれていると思います。

◆事業の概要

この恵まれた自然湧水もこのまま放置していれば、いずれは枯渇し、埋もれてしまうことも予想されます。そんな自然湧水の泉をなんとかして保存していきたいと考えました。

そこで、三つの地区を選定し、自然環境、地域との関わり等を考慮しながら、それぞれの地区の特性を活かし個性を持たせるような整備を検討してきました。総事業費は約一一億円です。

ここで、三地区の概要を紹介します。

①ひょこたん池公園（中川原）

重信川の堤防下を伏流した水が滲出して池を形成したものであり、地域の人たちが移植した「ていれぎ」が生育しています。そのため、水生植物を積極的に取り入れた公園とするとともに、地域住民の休憩と語り合いの場として整備しております。面積は五、四三五㎡（平成四年度完成）

②有明公園（大間）

大間地区の集落を貫流する国近川沿い一帯で、川岸には家ごとに洗い場（「くみじ」という）が作られ、かつてはそこで生活用品や野菜などを洗っていました。盆にはこの地区独特の伝統火祭り行事として、川に浮かべた麦わらに火をつけ祖霊を迎える迎え火、また送り火が行われています。このように、川が地区の人々の生活に密着した場となっており、国近川の残された自然環境を活かしながら広場や緑地の創出を図り、地区住民や泉のエリアを散策する人達の休憩、語り合いの場として整備しています。また、児童公園的な役割を持たせるため、遊具も設置しました。面積は五、五〇七㎡（平成四年度一部完成）

③福徳泉公園（神崎）

本町の東部北伊予中学校の西隣に位置しており、将来の人口増や町民のレクリエーション需要にも対応できる東部地区の核を形成する公園として整備するとともに、泉や川への理解と啓蒙を深めてもらうために、治水、利水、親水の働きを、遊びを通して体験できる学習型施設としています。そして、来園者が自由に泉の中に入ることのできる水遊び広場を設置します。面積は二〇、五三〇㎡

これらの施設を整備する上で、特に留意した点は次のとおりです。

・自然景観の保全
・植栽による緑化
・水生植物の保護
・石積護岸等の採用
・遊歩道の整備
・親水性を高めるため、水にふれることのできるスペースの確保
・四阿（あ）（東屋）等休憩施設の整備

このように、泉をテーマに豊かな水辺空間の創出に努め、住民にとって魅力ある公園となるよう整備を進めています。

◆今後の展望

今後は、三地区を有機的に結ぶルートの設定と整備により、各施設の相乗効果を高めるとともに、維持管理については地区住民の積極的な参加を呼び掛け、手づくりによる愛着心の湧く公園づくりを目指したいと思います。

そして、泉の自然環境を活かした休養と交歓、あるいは町民の健康増進の場として活用し、「うるおい」「やすらぎ」「ゆとり」といった、人々の心に何かを感じさせる公園として、また、「まちの顔」として誇れる公園としていく必要があると考えております。

◆おわりに

魚の棲めない川、水生植物の繁殖しない川、汚れた川に「やすらぎ」を感じる人はいません。自然のたくさん残った清らかな水辺にこそ、希望や活力が想像できるのです。また、鳥や魚あるいは木や花などの生物や自然と接することの大切さは、豊かな生活を送っていく上で欠かせないものであります。

これからも残された自然環境を保全するとともに、積極的に自然を創出することに努力を怠ってはならないと考えます。

生涯学習のまちづくり
――その3――
基本的な構想づくり――五つのI

愛媛大学教育学部教授
讃岐　幸治

まちづくりのためには生涯学習の振興が必要だし、また生涯学習の振興にはまちづくりが欠かせない。こうした認識が高まるにつれ、最近では数多くの市町村が生涯学習とまちづくりを意識的にドッキングさせ、「生涯学習のまちづくり」に取り組むようになってきている。

生涯学習のまちづくりの場合にしても、最も大事なことは、どんなまちにしていくのか、まちのビジョン、基本的な構想を明確にしておくことである。ところが、まちの基本的な理念も曖昧なままに、「まちづくりだ、まちづくりだ」と思いつきのイベントを次々と打ち出している市町村が多い。これでは、一時的な盛り上がりがあったとしても、まち全体が内的に発展していく力にはなりがたい。

どんなまちづくりを目指すのか、まちのビジョンを明確にすることである。その場合、少なくとも、次の五つのIを基本的に考慮に入れて、住民参加のもとにまちの構想を練り上げる必要があろう。

(ア)Identitiy(個性、主体性)を基調に

まちづくりは、誇りづくり、自慢づくりである。

ところが、まちづくりではなく、「まねづくり」だと言われる程、画一的でステレオ・タイプなまちづくりが多い。こうした個性のないまちづくりを進めていたのでは自分のまちに対して誇りも持てないし、自慢できるものでもない。

まちの地域特性に磨きをかけ、その地域ならではの「らしさ」、個性(Identitiy)を明確にし、他にないオンリーワンのまちづくりを進めていくことである。そうした個性的なまちづくりでこそ、住民の誰しもが真剣にわがまちをより良くしていこうという気持ちになれようし、またわがまちに対して誇りも自信も持てるといえる。「わがまちならでは」の個性的なまちづくりを進めていくことである。

(イ)Imagination(イメージ・創造力)のアップ

まちづくりは、まちの「顔」づくりである。

地域の特性を生かしたまちの将来像を描いたとしても、それが抽象的で分かりにくく、親しみの持てないものでは、その実現化は難しい。たとえば、「花と音楽の町」(北海道女満別町)、「鉄の歴史村」(島根県吉田村)のように、まちの「顔」がイメージでき、まちのイメージアップを図っていくようなものを目指すことである。

というのは、まちの将来像というのは、住民一人ひとりに夢、ロマンを与え、それの実現に向かって各人が持ち味を発揮し、動かざるをえないような、そんな想像力、構想力(Imagination)をかきたてるようなものでなければならないからである。

そのために、その将来像を達成

していくための行動原理、指針としてのコンセプト（基本目標）を明確にする必要がある。コンセプトを明確にし、どんなまちづくりを目指しているのか、鮮明にイメージでき、だれもがそれに親しみ、共感をもって協力参加できるようにしていくことが大事であろう。

（ウ）Intelligence（知性）のある土壌づくり

まちづくりは人づくりであり、まちの文化性を高めていくことである。

まちづくりは、現状に埋没したり、締めたりしているような沈滞した土壌にゆさぶりをかけ、まちの現状を見直し、各人自分の生き方を振り返り、明日に向かっての発展成長を目指した活動であり、各人の自己成長を目指した学習活動を不可欠とし、地域の文化性を高め、文化的・知的刺激の強い土壌を目指したものである。

地域の歴史的伝統や遺産など、地域の個性を無視せずに、地域の実情に即しながら、知性のある聡明な（Intelligence）文化的な土壌づくりを目指し、それぞれの地域の生活文化の向上を目指さなければならない。端的にいえば、文化を基盤にした「ときめき」のあるまちをつくっていくことである。

（エ）Innovation（革新）の連続

まちづくりは、地域変革の連続の過程である。

長期的な展望に立ってグローバルな視点から、まちをとらえ直し、埋もれている魅力を掘り起こし、まちが抱えている課題を検討し、常に新しい企て、新機軸（Innovation）を打ちだしながら発展を目指し、刷新（Innovation）しつづけるまちをつくっていくことである。

そうした常により良いものを求めて、住民もまちも革新（Innovation）しつづける内的なエネルギーを蓄えるためにも、生涯学習が必要になってきたわけである。

（オ）Integration（統合）してのまちぐるみ活動

まちづくりは、まちぐるみ活動である。

最後になったが、生涯学習のまちづくりにおいて最も大事なことで、まちづくりの目標に向かって、まちのすべての機関や組織などがバラバラでなく、Integration（統合）される必要がある。一部局やグループでできるものではない。

例えば、空間的に散らばっている教育作用――役場、企業、学校、公民館、農協をはじめあらゆる機関や事業など――をまち全体として、学習ネットワークのなかに有機的に位置づけてヨコの統合を図る。家庭、学校、公民館、農協、保健所などが、それぞれバラバラないし相対立するのではなく、相互に連携、協力の関係にあるようにしていくことである。

また、「ゆりかごから墓場まで」生涯に亘って学習できるように、例えば、学校が社会人向けの住民講座を開くようにするとか、時系列的にタテの面からまちの中にある教育作用や機関を相互にネットワーク化し、統合していくことである。

生涯学習のまちづくりは、こうした五つのIを基本的に含むものでなければならない。

ところが、まちづくりという名のもとに、これら五つのIを無視してバラバラに取り組んでいるところがまだ多い。各市町村のまちづくりが、この五つのIの観点からみてどうか、今一度じっくり検討してみることも大事であろう。

地域づくりのベースを求めて…

管見 スイスを歩いた2週間／見想録(Ⅶ)

【宗教内戦も共生を熟した国】

宮本俊一

◇近自然／熱源はツヴィングリか

なんの話からか…、私が「ゲルディーさんの近自然への真剣姿勢とパワーは、カルヴァンが熱源でしょうネ…」と言うと、シンポの会の亀岡さんは、「彼はツヴィングリだと言ったよ…」との答。

「ツヴィングリ…?」 初めて聞く名に私は慌てた。マックス・ウェーバーの影響で、自己に厳しいスイス人の倫理観は、カルヴァンだと独断していたワケ。ともかく苦心の末、二冊の紹介書物を入手し、「成程、ゲルディーさんならこの人だろう…」と思った。

「ツヴィングリは、昔も今もルターとカルヴァンの陰に立ち続けている。それは、彼が宗教改革に専心できた期間が短かったこと。また教皇庁だけでなく、ルターとその一派が異端の烙印を押したことによる…」「このような陰の存在であることは、彼が宗教改革者として、極めて独自な特徴を持ち、その個性がスイス誓約同盟を遙かに越えて歴史を形成してきたことを思うと、残念である…」

「ツヴィングリの神学。キリスト教信仰についての理解は、当時の教会と社会に強烈な衝撃を与えた。否、彼の生存中だけでなく、それはブリンガーとカルヴァンの媒介を経て、後世においても近代像を築くにあたって力となっていた…」 これは、私がイメージする彼の評価の最適な一文と想うので、あえて略記した。(森田安一訳・ピュッサー著『ツヴィングリの人と神学』／新教出版社)

◇改革へ／若き司祭の真摯な序走

一五〇六年、フルドライヒ・ツヴィングリは、二二才の若さでグラールスの司祭となる。当時のスイス誓約同盟は、ベリンツォーナを得て膨張策を進めているが、周辺諸国もスイス傭兵の獲得競争など戦備に狂奔…。教皇領さえ戦争好きのユリウス二世により、世俗国家と変わらない有様だった。

そうした一五一〇年、ツヴィングリは、彼の初著作『牡牛の寓話』を発表した。それは当時のヨーロッパ国際政治の諸勢力を動物に託して描き、傭兵制の危機を指摘し、スイスは列強争覇から身を引けと説くもの…。山間の若い無名の一司祭が、国際政治を的確に分析把握しているのは驚きだ。

その後彼は、一五一三年のノーヴァーラの戦いと一五一五年のマリニャーノの戦いに従軍司祭としてイタリアへ赴き、戦争の悲惨を体験…翌一五一六年から『傭兵制批判』を展開。一五一八年には『贖有券(免罪符)批判』で教皇政庁を糾し、同年チューリッヒへ転任。一五一九年『病の詩作』で福音主義を宣言して一五二二年には『宗教改革』に着手する。この間の彼の信仰と思想遍歴…人文主義研究と敬慕するエラスムスとの出会い。その素養での聖書と教父研究は重要だが…紙数上割愛する。

◇共和制／公開討論で新教を採択

ツヴィングリは、チューリッヒ大聖堂教会への就任に当り、カトリック協会の慣習を破って直ちにマタイによる福音書の連続講解を行うと宣言。その説教を重ねるとともに…各所に「聖書研究グループ」を組織したので、新教の信奉者が日々増加する。一方、これに批判的な旧教勢力も結束を固め、「福音派」と「旧教派」が対立して街頭での武力衝突に至る…。

ここに市当局は、一五二三年一月と十月の二度にわたる『チューリッヒ討論』を開くが、結果は新教派の勝利となり、チューリッヒは福音主義公認の邦となる。

ところで中世キリスト教ヨーロッパの大前提は、一つの地域には一つの信仰と、それに基づく共同体が許される…のが理念。地域共同体と信仰共同体、国家と教会とは同一空間がキリスト教社会。

つまり、一つの地域共同体に二つの信仰は不可。いずれか一方を正統とし、他を異端・異説として排除する。問題はその判断を誰が

下し実施するか…だ。しかし殆どの国々は、共同体の世俗的支配者…領主や国王が決定し、住民はその信仰の受け入れを強要された。

面白いのは、スイスには国王や領主がいない。共和制のチューリッヒは、住民代表として二つの議会が選ぶ市政当局…参事会がそれに当り、『チューリッヒ討論』では、直接民主主義の伝統から当事者双方に地域住民が参加する『公開討論』が行われていることだ。

◇全欧で／初の宗教改革内戦が

とは言え、一三邦の誓約同盟も一つの地域共同体だ。旧教諸邦はチューリッヒの逸脱を止めようとし、チューリッヒは他邦を福音主義化しようと…伝導活動をする。そこで誓約同盟の議会は、一五二六年五月、『バーデン公開討論』を召集、八二票対一〇票の大差でツヴィングリの断罪を決めた。

けれども福音主義は、既に諸邦に拡がっており、一五二七年オーストリア国境のコンスタンツが、内外旧教圧力に抗してチューリッヒと攻守同盟を結ぶと、ベルン、ザンクトガレン、バーゼルが直ちに加盟。スイスの北半分を掩う『キリスト都市同盟』が誕生した。

これに対し旧教諸邦は、一五二九年『キリスト教連合』を結成したが、かつての敵ハプスブルク家出身のオーストリア大公フェルディナントと軍事同盟を結んだ。これは新教諸邦の民族意識を刺激し、双方が軍事対決の準備を始めた。

ここで平地を占め豊かな新教諸邦は、生産力の低い山岳地帯の旧教諸邦に対し経済封鎖を行ったため、連合側は活路を戦に求め…ヨーロッパで最初の宗教戦争、『第一次カペル戦争』が火を吹こうとした。この時、スイス人の伝統…「共生と連帯」の感情が台頭。グラールス市長の仲介で和平した。

その和平は「信教上の理由で他邦に介入しない…」「各邦は住民多数派の信仰を公認の宗教とする…」等、全ヨーロッパに先立ち中世信仰の大前提を覆し、宗教多元化への途を拓くことになった。

しかし、スイス各邦の行政的帰属は複雑で、多くの土地が複数邦の共同主権下にあり、その信仰決定権の紛争が絶えず、色々な事件が絡み互いに実力に訴える構えが続く。そこで都市同盟は再度経済封鎖を決めるが、それを行う側も市場を失うため各邦の足並みが揃わず…チューリッヒが突出する。

機を見た連合は、一五三一年チューリッヒへ進攻…『第二次カペル戦争』を起し、準備不足のチューリッヒ軍を殲滅。ツヴィングリも四七才で悲壮な最後を遂げた。

驚いたベルンは、急遽大軍で反撃…連合領内まで追撃して和議を結ぶが、それは「旧教・新教双方の領域内の信教の自由と不干渉」「共同主権地域の住民自決権の承認」「信仰のことで他人を侮辱すれば処罰」「キリスト教都市同盟の解消」等…で、スイスの宗教地図は表面的には安定をみた…。

◇内外が／武装中立と独立の承認

勿論、この宗教対立はその後も色々な紛争を起し、現在でも、その「宗教分布」がスイス理解の一つの鍵…と言われているが、そうした状況を抱えながらも…誓約同盟は、この時代アルプス以北の全ヨーロッパに拡がった宗教戦争。わけても全ヨーロッパを巻き込んだ三〇年戦争さえ、厳に中立を守り、…スイス諸邦の分裂を防いだ。

このことは、一六四七年の「ウェストファリア会議」で、スイスの神聖ローマ帝国からの独立を国際的に承認させた上、同盟内では…その体験から、「同盟統一軍の設置」が決められ、スイス『武装中立』のスタンスを確立した。

また、この宗教対立の苦悩は、スイス独特の対立調停＝妥協方式を一段と成熟させたとの評価もあり、スイスの人の『共生と連帯』に自信を与えたのでは…と想う。

なおこの間、一五六六年に新教側は、ツヴィングリ派とカルヴァン派が『スイス信仰告白』を制定し宗旨の一本化を行うが、その教義は、スイス人の伝統的な質実剛健の気風に、世俗的禁欲を媒介する「勤勉」を加えたと言われ、私の独断もあながち…とにやり。

リレーでちょっトーク

言霊（ことだま）

大洲市
鎌田　リヨコ

無言でも、総てを語っているものの中に将棋盤がある。四本の足は、くちなしの実を表現し、そのうち一本だけが、持ち上げれば抜けるようになっている。〝勝負に口出しするな〟〝武器には武器で〟と勝負師に対しての心と技の粋に感銘を受けた。

三月末、いま出来る事からと孫二人と一緒に小さな旅を試みた。三歳九ヶ月と三歳半の男女児。体格、性格ともに正反対。都会っ子の女児は口達者である。初めて親を離れての三週間の旅。毎日超多忙で油断も隙もない毎日であった。極力野外での遊びに挑戦させた。

〝文化は手から〟〝土こそ文化の根底〟という持論で真剣に取り組ませた。一コマを紹介すれば、畑に一人が入れる穴を二つ。二人が入れる穴を一つ。野良仕事の道具・竹・板・ひも等準備した。汗まみれ、泥だらけになり、水を飲んで四時間ぶっ続けで遊んだ。我慢、辛抱、協力、工夫、その遊びに熱中した姿は、予想外の展開ぶりだった。通行人も止まり、呆気に取られていた。

体験こそ〝生きる力〟である。実は、この小さな旅には、もう一つ目的があった。それは、体験を通して言葉の克服を試みたかったのである。

小さな旅で、孫達は水や汗の味と土の匂いを知った。草の葉末の露玉を、女児は「お星さまがいっぱい」と言い、男児は、手をたたいた。

孫達とは、松山で別れた。帰宅後、田舎での心の栄養と体力づくりが、幼稚園の行事の「七夕飾り」と「泥んこ遊び」に現われた。声をかけ、運動場狭しと水を流し、川を造って工事現場らしきものを再現した我が子の変容に涙した娘からの喜びの声が、今も耳から離れない。

そこで、視点を回りに広げてみると、

○一声かけたばっかりに…。旅先で、女の子が、ハンカチを落としたまま駆けて行った。

「嬢ちゃん、ハンカチが落ちたよ」

「いらんもん」

「まだ使えるよ」

「お家にいっぱいあるもん」

振り向きもせず、駆けて行った。

○現代人は、よく喋るがもの言わぬ…。立場を理解しての話し方が出来にくく、ぼかし言葉が多い。主語がないから、語尾がはっきりしない。これは、自己が確立されていない「証」ではなかろうか。

○敬語の使い方が逆転…。教師は生徒に敬語、生徒は教師に友達言葉。何故変ったのだろう。

○親子の会話…。

「今、何してるの」

「人間やってる」

ほんとうに、心があるのかと思う。

終りに、大洲ホーム（身障者施設）の園生（五七歳・男性）は、花を活けに伺うと、

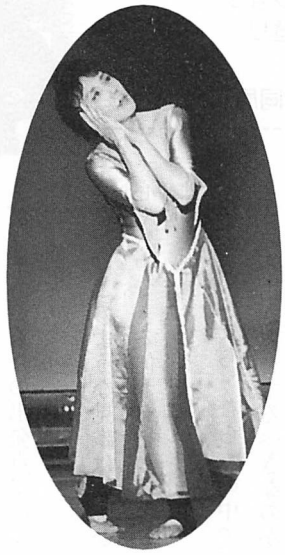
「あなたは、季節を告げる女神さまです。私共は花を観て季節を感じます。花は、何時でも誰にも美しい心で接してくれます。有難うございます」と合掌される。

言葉は言霊（ことだま）である。「言葉の乱れ」は「国の乱れ」と言う。お互いに心したいものだと思う。

次は、元小学校長の大洲市の白石美子様にお願いします。

DANCE =A Life

新居浜市　柴　千恵子



分野はジャズダンス。アップテンポで激しいだけと思われがちですが、メリハリのある楽しいリズムと深く余韻のある広がりは、作品になるとドラマティックで、ジャズダンスならではです。踊りの世界も時と共に変わり、前衛的なもの、和と洋、即ちバレエと歌舞伎、琴とジャズダンスの組み合わせなど新しい取り組み、挑戦は常に生まれながら、変わらないのは日頃の基礎鍛練であることは言うまでもありません。作品は、曲、創る人、踊る人の心が一体になり完成しますが、更に難しいのは、観る人の心を打つことです。稽古中でもそんな時があり、みんな声もなく感動します。踊っていてよかったと思う瞬間です。六年前、新しくスタジオを造った機会に、何か地域の人たちの役に立ちたいと、夫（専門が体育）と共に「お父さんの健康づくり」教室も開きました。また、お許しを頂き、年齢制限のある「ヤングネットワーク」という町づくりのグループに入会し、機会あれば役に立ちたい意欲を持っています。

今年は作品発表の年。小さなスタジオは、連日熱気で酸欠状態です。人の努力というものは、実りがあると改めて思い、その日を今二ケ月後に控えて、共に燃えています。メインプログラムは、ミヒャエル・エンデの童話「MOMO（モモ）」です。ジャズダンスによるダンスドラマとしました。

現代の人々の時間がない、時間に追われている、足らない時間とは、実は黒フードの男（時間泥棒）に盗まれていたのです。人間の一生の定められた時間から、「しゃべるな、人に優しくするな、食べる時間も惜しめ、笑うな、すべて早くしろ、心はいらぬ」と急き立て、操り、時間を引いて盗み、実は食べて生きているのです。その時間を取り戻してくれた不思議な少女モモの物語です。

今の社会にはびこる不正、いじめ、傷ましい事件、政界の腐敗。もしかして、青白く冷たい顔で姿の見えない黒フードの男が、人々の心をカサカサにしているのかも。人間らしい気持を取り戻させてくれたモモは、私たちの世界にも必要です。ずっと、この作品をドラマにと願ってきました。映像ではなく、ステージの上での立体化ですので、原作通りにはいかない面も多くありますが、出演者は仲良く情熱を持って稽古に励んでいます。十月三日（日）午後二時開演。新居浜市民文化センター大ホールで小作品一一曲と共に発表します。心に留めていただき、読者の皆様是非観に来て下さい。終演の幕が降りた時、あふれる思いは・・・喜びも悲しみも踊りと共に。

次回は、今治市長沢の本宮和代様にお願いします。

一年三六五日、何千回もの稽古に励んでも、踊りの奥は深く行き詰まってはまた立ち上がり、発表会では本番一回限り。観る人の心の映像にいつまで残るか。思えば虚しい作業と落ち込みながらも、どんな音にも動きにも中身があることを聞き分け、表わそうという方向と、回ること、跳ぶことより（技）踊る心を伝えたい姿勢で指導し、共に励んでまいりました。

元気印レポート

松山市
綱島　重明

プロフィール

生年月日	S32. 5. 31
職　　業	パン店経営
趣　　味	オーディオいじり イラストレーション 渓流釣り・沢登り 料理など多彩
好きな動物	猫（愛猫二匹と同居）

『ヒューマンライフ…』

今日、自分らしく楽しい日々を送るため、その地域で自分なりに生き方のベース（基本）、意義、価値観等を見つけることが重要になっていますが、このような見識を持ち、まちを見つめ、考えることが、まちづくりの出発点ではないでしょうか。

また、このような見識は、遊び心や熱中できる何かを持つことにより養われるような気がします。

そこで、「まち・むら」の中で、どういう生き方をするべきなのかについて、フロンティア塾（21世紀ニューフロンティアグループ）への参加などで、自らのパーソナリティに磨きをかけておられる綱島重明氏に伺ってみました。

Q　はじめに、鰻壽庵のことをお聞かせ下さい。

A　鰻壽庵は、義父の川口寿雄がフロンティア塾の新聞記事を目にして現地を訪れてみて、眺望のいい双海町東越地区で何かをしたいという気持ちから、廃屋を購入し、環境のバロメーターともいえるメダカを飼うことにより、生物（人間も含めて）にとって大切な自然環境を考え、社会に貢献したいということで始めたようです。

Q　六月二〇日に開催された「めだかの音楽会」について、お聞かせ下さい。

A　この音楽会については、人々の懐かしい思い出として残る廃屋で、琴奏者の白方さんが演奏してみたいということから企画が始まり、自分たちだけじゃなくて、鰻壽庵で活動をする仲間や関心のある方々に、口コミで情報を流し、最終的に五〇人が集まり、「めだかの音楽会」を開催しました。

また、イベントに携わって、鰻壽庵の取り組みの趣旨をたくさんの人に知ってもらうとともに、行ってみたくなるようなイベントの演出をするためにも、懐かしさや郷愁を感じる廃屋は好条件だったと思っています。

そして、来て頂ける方の立場で会場設営をしながら、やる側の自分たちも楽しめることからやっていこうと考えました。

Q　実は私もそのイベントに参加したのですが、床の間に竹で格子戸のようなものを作ったり、花瓶に野の花を生けていたり、あの雰囲気は素晴らしいと思いました。やはり、コーディネーターのセンスによるものでしょうか。

A　ありがとうございます。参加者に驚きと感動を共感してもらえるような、会場の飾りつけ等の演出をしたことにより、音楽会が引き締まったものになったと思っています。

めだかの音楽会より

Q　この感動をどう今後につなげていこうとしておられるのですか。具体的に計画があればお聞かせ下さい。

A　今後の計画としては、今年の秋頃に「めだかの学校」を開催し、音楽会も同時に行い、ジャンルにこだわらずに年二回の音楽会を、鱧壽庵のレギュラーイベントにしていきたいと考えています。

また、チーム鱧壽庵の会員で人形劇団や音楽などのグループを結成し、自然保護等の問題を子どもたちに訴えるような活動ができたらと夢を膨らませています。

Q　イベントの話はこのあたりにしておいて、今度は綱島流の生き方についてお尋ねしたいのですが。

A　特別にはありませんが、自分にとっても周りにとっても、常に自然体（ナチュラリスト）でいることを大切にしています。

Q　具体的にいうとどんなことですか。

例えば、自分らしくいたいというか、その年齢に応じた「らしさ」を失わず、周りに流されるのではなく、その時の自分の心に素直に生きるということでしょうか。

A　違うともいえませんが、「らしさ」の構築はCI戦略と同じで、自然体の条件として、「らしさ」もその重要な一部を担うと思います。

結局、「自分」を表現できない人は、「人」を表現できるはずがないように、「らしさ」をもっている人は自分を持っているということではないでしょうか。

もっと、自由に自分の楽しみを見つけ、熱中できる仲間が何人いるかということが大切だと思っています。

そういう友だちの中で、自分にとっての「楽しみ」や「らしさ」が芽生えてくると思います。

また、自分を知ることが、世のため人のために何かをできることではないかと思います。

Q　それは、あくまでも自分を理解し、認めるということによって、「らしさ」の構築を図るということですね。これは、企業のCI戦略に学ぶべき点があるということなのでしょうね。

お忙しい中、貴重なお話をお聞かせ頂きありがとうございました。

今回の取材で、まちづくり・むらおこしという鎧を着る前に、生身の自分のことをもっと見つめ直すことが必要ではないかという思いを一層強くしました。

綱島さんの、「メダカをほしいと鱧壽庵を訪れる人に対して、たくさんの命を預かっているのだから、それじゃあどうぞと簡単にはあげられない」ということや「いまのまちづくりを見ていて、もっとビジュアルから取り組むことにより、CIによる視覚的効果でまちづくりに対する住民意識を高揚させようという動きが少ない」、「イベントの中に、参加者が緊張と緩和を感じられるような演出づくりが大切ではないか」など、まちづくりの根源に触れるような数々の言葉が印象に残りました。

まちづくりに携わる一人として、自分の楽しみ、心地よさを認識し、その中で自分のできることを考えること、滅私奉公より楽私楽他というか、「自分も楽しく、人も楽しく」という生き方・考え方で、その接点がまちづくりの基本のような気がしてまいりました。

（取材／研究員　尾崎　弘典）

鱧壽庵は仲間を求めています。

現在、鱧壽庵での活動要員は、約35名。微力な人間だけになかなか活動がはかどりません。興味のある人の活動の仲間入りを鱧壽庵では望みます。ひとりひとりの力は微力でもたくさん集まれば大きな力になります。そして、その大きな力で未来の子供達の為に今出来ることをしておこうではありませんか。

活動予定

◆メダカの養殖◆メダカの放流◆鱧壽庵倶楽部の発足◆他グループとの交流会◆鱧壽庵倶楽部の研究発表会◆メダカ分布状況の把握◆etc

いろんなことを考えています。ぜひ、仲間となって楽しく興味深く活動をしてみようではありませんか。

鱧壽庵（こうじゅあん）　庵主（あんじゅ）　めだか家川壽こと
川口寿雄

連絡先　鱧壽庵　0899-86-0859
自　宅　0899-73-0653
KOTOBUKIYA BREADS　0899-72-0278

愛猫　マーブル

元気印レポート

アトリエU・M・Aって何？

広域まちづくり協議会「アトリエU・M・A」

会長　高井　啓治郎

■夢を描く団体

ア　あなたが、
ト　トレンド宇摩を
リ　リードして
エ　描く
U
M　宇摩（うま）
A

私たちは、画家とか、写真家のような芸術家集団ではありません。

しかし、宇摩地域というキャンバスに、夢のあるデザインを描くということに関しては、多分に芸術的センスを要求される集まりであるといえます。

宇摩地域の五市町村（川之江市、伊予三島市、土居町、新宮村、別子山村）の地域住民七七名（うち女性会員二五名）で構成される広域まちづくり団体『アトリエU・M・A』は、「私たちの手で新しい宇摩をデザインしてみませんか？そして行政区域を越えたまちづくり・むらおこしを」という発想で生まれました。

■ふるさとづくりのデザインの考え方

私たちの住む宇摩地域は、

①四国の中央に位置する。

②豊かな自然が存在する。

③紙の地場産業が高度に集積した地域である。

これらの条件の可能性を考慮しながら、地域内の交流推進及び四国へ、日本へ、そして世界への情報発信を図る。

■誕生までの経過

広域でまちづくりを考えようとする動きは、数年前からありましたが、その大きな動きは次のとおりです。

'91第一回宇摩首長サミットの開催

二市一町二村の首長がパネリストとして出席。川之江JC、伊予三島JC主催。

'92ふるさと宇摩デザイン会議の開催

JCの主催により延べ九回開催。

'92第二回宇摩首長サミットの開催

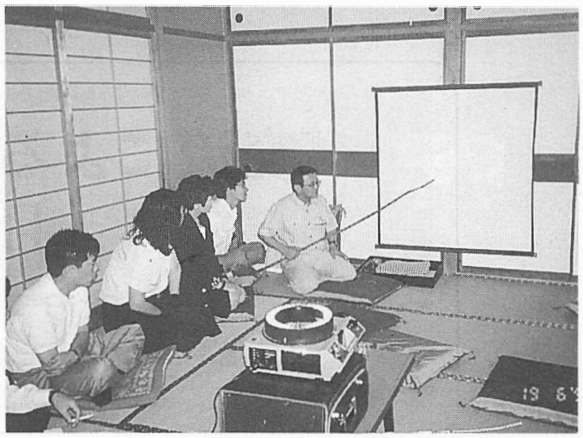
「創ろう四国交流物語」をテーマに討議。広域まちづくり委員会（仮称）の開催。広域まちづくり協議会の創設を提案。

広域まちづくり協議会発足準備委員会の開催

'93アトリエU・M・Aの結成

■平成五年度の事業予定

六月　別子山村視察交流勉強会の



実施

七月　UMAフォーラム21の開催

八月　四国かわのえ紙まつりの協賛

紙おどり、物産展への参加

十月　新宮村塩塚高原広域スポーツイベント（パラグライダー）の研究

一月～土居町やまじ風シンポジウムの事前準備及び研究

三月　広報誌の発行　二万部印刷

■UMAフォーラム21

去る七月四日(日)、伊予三島市福祉会館において、約一五〇名の参加を得て、協議会として最初のイベントとなる「UMAフォーラム21」を開催しました。

第一部のトーク・アンド・トークでは、南宇和高校サッカー部監督石橋智之氏から、大変楽しく、興味深いお話をお聴きすることが出来ました。

自分の出身地を紹介する際に、南宇和というだけで全国に通用するということは、実に素晴らしいことであると痛感しました。

また、第二部のフォーラムでは、各界のスポーツ指導者をお迎えし、「四国中央地域を意識し、四国大会のできるまちを目指して」というテーマで、この地域の可能性を探ってみました。

それぞれの立場から建設的なご意見やご要望をいただきましたので、これからの活動に活かして行きたいと思っております。

■これからの課題

発足したばかりの団体であることから、まず全員で話し合う機会をどんどん設け、自由に意見交換の出来る雰囲気をつくり、もっともっと会員相互の交流を深め、明るく、楽しい会にして行きたいと考えています。

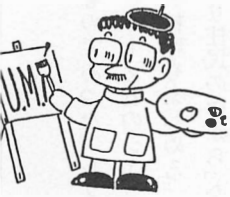
まちづくりやむらおこしに興味や関心のある若者はかなり居ると思いますので、様々な活動を通じて、この地域が少しでも住みやすく、若者が魅力を感じ、定住出来る地域になっていくということを目指して頑張りたいと思います。

地域づくりの為には、人づくり・ネットワークづくりが何にもまして大切だと思います。

私たちの活動は、今緒に着いたばかりですので、皆様からのより一層の御指導・御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■おわりに

アトリエU・M・Aの活動を通じ、交流の輪を広げて行きたいと念願しているところです。



『交流による活性化を目指したまちづくり』

――まちづくり研修レポート――

研究員　石家　清

今年の梅雨は、やたらと雨が降り続いた毎日でしたが、私たちは晴間を縫うように、七月七日（水）から九日（金）の間、福岡県・熊本県・佐賀県・大分県方面を訪ね、まちづくりの研修を行いました。

今回は、自然と共生する「杣の里」づくりを進めている福岡県の矢部村をはじめ、佐賀県諸富町、熊本県小国町などを訪問しました。

研修の模様を私見を交えながら報告します。

✣ 秘境「杣の里」（矢部村）

矢部村は、福岡県の南東部に位置し、村面積の約九割が山林という、山あいの静かな村である。熊本・大分両県の県境に接しており、周囲には高い山々が連なっている。福岡市内から車で約二時間を要し、このことも「秘境」と称する要因となっているようである。

過疎化・高齢化が進む中、村中に強い危機意識が生まれ、「悩むだけではいけない、なんとかしなくてはいけない」ということから、現在の取組みが始められた。

具体的事業の取組みは、昭和六二年度に国土庁のリフレッシュふるさと推進モデル事業の指定を受け、「秘境杣の里渓流公園」の整備が進められたことに始まる。この事業の中心は、過疎地域と都市との交流であり、体験交流等を行う拠点として、周辺の山々や渓流をはじめ、恵まれた自然景観を十分に活かした施設づくりがなされている。

公園に着くと、まず渓流に架かる木の橋を渡る。川の水量は豊富であり、水質は良好で、保健所の折紙付きらしい。川の水でソウメン流しができるそうである。渓流脇の傾斜地には、宿泊施設「ソマリアンハウス」をはじめ、レストラン「ル・クレソン」、木工・染め物・陶芸の体験施設の「クラフトセンター」などが建設されている。また、敷地の一番上には、渓流を眼下に見下ろす歩行用の「大吊り橋」が架けられている。

これらの施設は、北欧風のモダンな建物であるが、以外と周りの風景に調和し、アンバランスさを感じさせないものであった。レストランでは、Uターン者のシェフによるフランス料理も楽しめる。

当初は、やはり住民の中から「なぜ、この地にこの施設か、料理か」という疑問や反対の意見があったらしいが、村当局では、「これからの時代は、従来の意識を改革しながら、よそにないことをしていかなければ生き残っていけない」との認識で、実施に踏み切ったとのことである。とは言え、村内での理解を得るため、村当局はかなりの苦労をされたようである。

平成元年度にオープンしたこの

自然の中に佇む「秘境杣の里渓流公園」

施設も五年目を迎え、訪れる人も年々増えて、延べ一二万六千人もの利用者を数えるようになった。その運営は、第三セクターの「㈶秘境杣の里」で行っており、村への経済効果はもちろん、雇用の場としての機能を果たしているようである。

ここで注目されるのは、財団の出損団体に九州の大手企業が名を連ねていることで、「秘境杣の里」の施設が、社内の研修や厚生施設として利用されるとともに、都市へのPRが自動的にできる仕組みが出来ていることであり、村の戦略を垣間見ることができる。

また、村を訪れる人たちと息の長い交流が続けられることを目的として、特別会員制度も設けられている。

さらには、村の情報発信・受信基地として、昨年四月に、福岡市天神に矢部村のアンテナショップ「ソマリアン」を開店している。山村の良さをPRし、都市の人たちを引き込むことを目的に出店されているが、立地条件もよく、渓流の天然水をはじめ村の産物を毎日搬送し、料理の材料として使用するなど、演出すべてに工夫が施され、店は大変盛況であるという。

このような矢部村の取組みは、村の総合目標の三本柱の一つ「交流～出会いを深める交流の村づくり～」の一環として行われている。その基本理念は、「都市と農村との対等な立場での交流」であるがメイン施設によってイメージ化を図り、村の良さが強く都市にアピールされている。

また、都市との交流が、農林業へも経済的な波及効果をもたらし、このことが、住民にとって大きな関心事となっているようである。

こうした一連の取組みにより「矢部村」が広く知られてくるに従って、我がふるさとに誇りを持ち、ふるさとを愛する気持ちが芽生えた人が多くなってきたという。それとともに、村へのUターン者や転入者が増えている状況となっている。

また、周辺の町村も矢部村の試みに刺激され、まちづくりへの新たな活動が始まっているとのことである。

矢部村企画財政課の栗原浩暢係長は、「都会人が自然に憧れるのは、人間としての本来の生活志向が田舎（自然）にあるためであり、いずれは山村の時代が来ると思う。いつでも帰ってくることができる受け皿として、ふるさと矢部を守っていきたい」と力強く語られた。

矢部村を訪ねてみて、村の活性化と山村の生き残りを賭けた取組み、そしてその企画の素晴らしさというものを感じずにはいられなかった。

大吊橋から公園を一望

しかし、一方で自然的条件・地理的条件等を考えると、福岡市のような大都市を抱える「福岡県の矢部村だから出来たのだ」という面もあるように思う。発想を変えれば、「愛媛県の○○○だから出来るのだ」と言えることが何かあるはずだと考えながら「杣の里」を後にした。

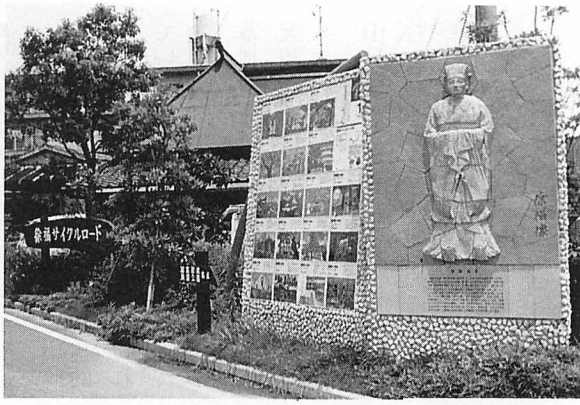
✣ ふるさとを大切にする心を

（諸富町）

佐賀県諸富町は、筑後川の河口部に位置し、福岡県大川市と川を挟んで境界を接している。

昭和六二年に廃線となった旧国鉄佐賀線跡地（総延長四二㎞のうち町内約三㎞）を利用し、「徐福サイクルロード」を整備している。今後は、筑後川に架かる可動（エレベーター）式鉄橋を利用した施設整備が計画されている。

徐福サイクルロードには、同町主催の全国ふるさとの絵コンクールに日本全国、世界各国の小学生から寄せられた五、〇〇〇枚の絵から二八四枚の入選作（日本二六



子どもたちの絵が陶板となって沿線に並ぶ

〇枚、世界八カ国二四枚）が、半永久的な有田焼の陶板に加工され、「全国ふるさとちびっこギャラリー（青空美術館）」として、サイクルロード沿線に展示されている。そして今では、絵を見るために家族連れが全国各地から訪れるなど、絵を通した交流が広がっているとのことである。

また、道の両側には、桜並木や各地方の花や木が植えられており、サイクリングを楽しみながら、日本全国・世界各国のふるさと巡りができる仕組みとなっている。訪問当日も、サイクルロードに自転車を走らせる家族連れの姿が見られ、地域に密着した施設になっているとの印象を受けた。

このように、諸富町では町の歴史と文化を活かして、子どもたちにふるさとへの愛着心とふるさとを思う心を育てていくまちづくりが進められている。

✣ すばらしい出会いを（小国町）

「悠木の里」づくりを進め、ゆうステーションや小国ドームで知られる小国町では、「木魂館」の江藤訓重館長を訪ねた。

「木魂館」は、小国町の人づくりの拠点であり、研修・交流の場として、町内はもとより県内外からも多くの人たちが集まって来る。江藤さんは、人とモノのネットワークづくりでよく知られている若い館長さんである。

「おぐに未来塾」に続く「土地利用計画チーム」や、着々と進められている「まちづくりのデータベース」の構築など、現在の取組みについての話を伺った。

江藤さんのお話を伺っている間にも、視察を含め多数の来館者がひっきりなしに木魂館にやって来る。

そこで、私たちは新たな出会いを体験した。偶然にも、小国町に永住を予定されている詩人の須永博士さんが来られていたのである。別れ際に私たちに素晴らしいまちづくりの詩をプレゼントしていただいた。まさに、胸が熱くなる感激の交流であった。

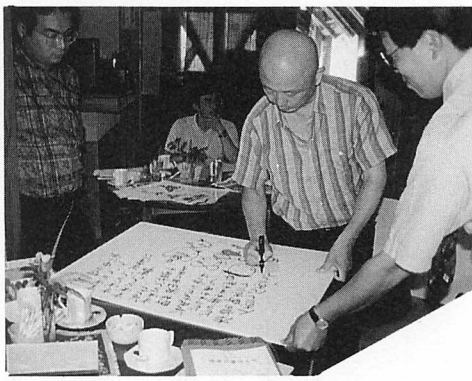
木の香漂う交流の館「木魂館」

✣ おわりに

今回の研修では、地域の素材・資源を活かし、交流によって活性化に繋げようとするまちづくりの姿を見ることができたと思う。

とともに、地域を見つめてこのまちには「何が大切なのか、必要なのか」を考えていくことの重要さを、改めて考えさせられた気がする。

なお、ここでは御紹介することができませんでしたが、福岡県地域政策課の伊藤信勝課長補佐をはじめ、柳川市の広松伝さん、大山町の緒方英雄さんには、大変お忙しい中、心良く御対応いただきましたこと、誌面を借りてお礼申し上げます。


左端が江藤館長
中央は詩人の須永博士さん

研究員活動を振り返って

まちセンの旅

中山町役場　上ノ田　誠一
（元研究員）

「自分達の住んでいる集落・地域が良くなることが、ひいては町が良くなることだから……。」

こんなことを言って何か漠然と過ごしていた公民館主事時代。時折、地域づくりの研修会に参加すると町の将来が気に掛かると同時に、子供の成長に伴い、「将来子供がこの町に残るだろうか?」、こんな思いが交錯していた。

そのような時、「まちづくり総合センター」への派遣の話が持ち上がった。丁度わが家の一大事業を控え、躊躇したが、案外足元を見直すチャンスと思い、山から城下への往復が始まった。

まちづくりに対する思いはあれど、確たる信念の無い自分にとって、人に会うことは、はなはだ気の重いことであった。勤務して間もない四月のこと、五十崎、内子、双海を訪問。お会いしたのは、以前から顔見知りの方々であるが、改めてお話を伺い、実践活動だけでなく、信念や学びの深さとともに、町の将来について語られるのには、ただ敬服するばかりであった。人に会うことのすばらしさと心地よい感動を覚えたのを記憶している。

取材のため、湯布院のN氏にお会いした。最初は緊張して、言葉が余り出ないにも拘らず、親切かつ流暢な語りでもてなしていただいた。地域への思いと文化への造詣の深さには驚嘆するばかりであった。

兵庫県網野町では、子供たちの将来を憂い、民間の方が中心となり塾活動を行いながら自分たちで出来ることから活動を進めている姿を研修。中心人物のY氏からは、『舞たうん』を送付する度にお礼や近況を知らせるハガキが届く。実に人との出会いを大切にする方であると感心すると共に、人柄の誠実さ、律儀さを痛感する。

隣の町のW氏が、一日に二枚のハガキを書くことを今でも進言して下さる。筆不精の自分には、似合わぬが、漸く、八月一日の冷夏御見舞いから実行することとした。

（本誌を借りての公言となりました。実行の如何をお見定めください。）

富山県の利賀村は二度訪れることができた。N氏に会うのと世界そば博の視察。地域の文化・資源を大切にして、交流を通して村に磨きをかける。大胆で且つ繊細な面を知る。一、六〇〇人の村のパワーには驚くばかりである。

長野県の妻籠宿のK氏にも驚かされた。現役を退いたとはいえ、今なお衰えぬ町並保存運動への意欲、バイタリティーは、聞きしに優る人であった。

バイタリティーと言えば、岐阜県蛭川村のI氏を思い出す。地場産業の石材会社を経営する傍ら、石の博物館づくりに取り組む氏のパワーには岩をも砕く勢いを感じた。情熱と意思の固りのような人であった。

紹介すればきりがない。この二年間は、実に多くの人と出会い、出会いのなかで感動を覚えた日々であったように思う。会う人それぞれが個性派で、地域への思いや地域づくりの情熱に溢れ、意思、信念の固い人達ばかりであった。そういう人達と出会えたことが、今後の自分の財産となると信じている。

時が経てば、短い二年間であったが、数多い貴重な体験をさせていただいたことを、現場でどう生かして行くのかが、自分に問われてくるのだと考えている。

幸いなことに、現在、島根県吉田村の藤原洋氏の協力を得ながら、総合計画を策定中である。策定作業を通しながら、自分を高め、職場・地域が高まれば、氏曰くところの「選択定住地域」、つまり、この町に子供が残るまちづくりが出来るのだと思っている。

これから目指す「幸せな暮らし」の実現に向けて、物的充足感と精神的・文化的充実感がバランスよく得られる環境やシステムづくりに汗をかきたいものである。

そうめん流し「名水亭」オープン

宇和町

昭和六〇年に日本名水百選に選ばれた「観音水」に、このほど、そうめん流し「名水亭」がオープンしました。

観音水は、鍾乳洞から湧き出る水が、日量八千トン。水温は年間を通じて一四度。豊かな冷水を求めて、南予一円から日曜ともなると六百人余りが訪れていました。

地元では、この豊かな「水」を町おこしに活かせないかと検討を重ね、老人クラブが中心となり、観音水観光事業部を発足し、多くの人達が手づくりで整地を行い、名水亭と特産品売り場が完成し、六月二〇日にオープンしました。

霊水を持ち帰る人、そうめん流しに舌鼓を打つ人、豊かな水と渓流の美と涼風を求める人、手づくりの特産品を求める人々で日曜ともなると千名程の観光客で賑わいを見せています。

完成！吉海町バラ公園

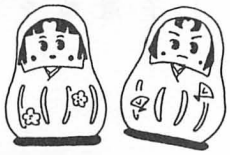
吉海町

花の王様……バラ。町民のアンケート調査に基づき、平成四年度地域づくり推進事業によりバラを主体とした「吉海町バラ公園」が完成。去る六月六日には、「花と子供のフェスティバル」が行われ、島内外から四千人を越す人々が、バラの香漂う中楽しい一日を過しました。

バラの開花時期は、春から秋までと長く、園内には世界各国のバラ一二〇種、四、二〇〇本が植えられている。さらに、花時計・噴水・トイレ・休憩所・地元産品大島石のシンボルゲート・シンボル像・遊具等があり、花に囲まれた美しいやすらぎの空間で、家族連れでのんびりと休日を過ごせる県内初のバラ公園となっています。

この公園八、〇七三平方メートルに隣接して、郷土文化センター、B&G海洋センターや野球場、テニスコート、クロッケー場も整備されており、幼児から高齢者まで気軽に利用されています。

問い合せ先
吉海町公民館
☎〇八九七（八四）四三二二



心も身体もリフレッシュ！「B＆G財団御荘海洋センター」オープン

御荘町

去る六月一〇日、生涯スポーツの拠点となる「B＆G財団御荘海洋センター」が御荘町にオープンしました。

当センターには、体育館・温水プール・トレーニングルームを完備しており、町内は元より、町外からも多くの方々に利用していただいております。

今後も、各種スポーツ大会、教室等を数多く開催し、幅広い年齢層に親しまれる施設として積極的な運営に努め、町民の健康維持・増進を図るとともに、スポーツを通しての「健康で活力のある豊かなまちづくり」を目指していきたいと考えております。

スタッフ一同、皆さんのご利用をお待ちしておりますので、ぜひ一度足をお運び下さい。

広がる『お手玉』ネット 第二回全国お手玉遊び大会へ

新居浜市

昨年九月に新居浜市で開催した『第一回全国お手玉遊び大会』は、参加者延べ三、〇〇〇人という盛況であった。この時から全国各地からの反響、反応は主催者も驚く程であり、この流れはどこまで続くのか未だに予測できない。『日本のお手玉の会』を昨年九月に設立、本年一月には同事務所を新築設置。事務所内には全国（海外も）のお手玉を展示しており、遠く東京からの訪問者を含め既に五〇〇名の人が訪れており、全国各地、愛媛県内でも支部設立の動きが活発化してきている。また、今年から新居浜西高校では、正規の授業に『お手玉』を取り入れている。

現在、第二回全国大会の準備に事務局は大わらわ。競技内容・遊び方を含めた宣伝ビデオも作成、各地に送っている。是非、子供さんも、お年寄りもご家族そろって、また職場、地域のグループで大会に参加して『お手玉遊び』に熱中してみませんか。

☆第二回全国お手玉遊び大会

日時　一〇月一六日（土）

　　九時三〇分～一六時

会場　新居浜市山根総合体育館

主催　日本のお手玉の会・全国お手玉遊び大会実行委員会

☆問い合せ先

日本のお手玉の会事務局

〒七九二　新居浜市庄内町一－一三－一四

☎〇八九七－三六－〇六〇〇

※お手玉紹介ビデオ　有料

『舞たうん』読者アンケートの実施結果について

県内外のまちづくり情報誌として昭和６１年以来発行して参りました「舞たうん」も、今号で３６号となり満６年を経過することとなりました。今後更に誌面の内容向上を図るため、広く読者の方々のご意見を頂くこととし、「舞たうん」３５号（平成５年６月１５日発刊）で読者アンケートを実施致しましたが、結果の概略は次のとおりでした。

設問①興味のある記事（複数回答）

１．特　　集	８９人
２．ふれあい広場	６１人
３．媛のくにフラッシュ	５０人
４．レポート	４９人
５．論談まちづくり	４４人

設問②「舞たうん」に望むこと（主な意見）

・派手でなくてもよい、地道な活動事例の紹介
・広域圏域での取り組みの紹介
・全国の先進事例の紹介
・民間で頑張っている人や生の声
・地域を支える女性の活動特集
ｅｔｃ….

上記のとおり、特集記事に大きな関心が寄せられていることが分かりました。また、誌面の都合上意見・要望については、その全てをここに掲載出来ませんが、他にも多くの貴重な意見を頂いております。

今回のアンケート結果等を参考にして、より一層内容の充実に努め皆様のご期待に応えて参りたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

なお、最後になりましたがアンケートへのご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

吸い込まれそうな青い空……とぎれることなく響いている蝉の声。今年もこの声を聞く度に暑さが増すような気がします。

まだまだ暑い日が続きますが、体調を崩さないよう夏を乗り切ってくださいね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係
二人のＭｓ・（白石・川原）まで
〒七九〇　松山市三番町八丁目二三四番地
愛媛県生活保健ビル三階
㈶愛媛県まちづくり総合センター
ＴＥＬ　〇八九九（三二）七七五〇
ＦＡＸ　〇八九九（三二）七七六〇

発行・平成五年八月十五日
㈶愛媛県まちづくり総合センター
えひめ地域づくり研究会議